

# 4つの「する」

横浜市小学校社会科研究会

会長 高島聡

令和6年度が始まりました。今年度、研究会長を拝命いたしました川和東小の高島です。社会科研究に育てられ、三十数年がたち、会員の皆様に向け、多くの先輩方や仲間から受けたご恩をお返しできるよう努力してまいります。

さて、この4年間に目を向けると、さまざまなことがありました。何より一番は、感染症対応と、それに伴う教育活動の制限、臨時休校や分散登校。研究活動も大幅な制約を余儀なくされました。そんな中でも、忘れられないのが2020年「全小社神奈川大会」の開催です。様々な困難の中、時の会長、梅田校長先生の「最初からできないと思うのは違うと思う」「最大限の感染症対策をとれば、神奈川の研究を必ず全国に発信することができる」という強い決意のもと、横浜では、西富岡小・稲荷台小・山元小で、素晴らしい実践を発信することができました。また、文書提案ではありましたが、多くの先生方が実践提案を発表できたとともに、全国から予想以上に多くの先生方が神奈川にいらしたこともたいへんうれしく思いました。その結果、その成果が、2021年度以降の研究活動を推進する「原動力」になったことはみなさんご存じのとおりです。

一方で、この4月に区の研究会に参加すると、自己紹介で「社会科を担当していない」「授業の進め方がわからない」とおっしゃる方が多くおられました。働き方改革に伴う教科分担制の浸透、多くの新採用の先生方が現場で活躍されるようになったことから考えると、それは仕方のないことかもしれません、わたしは、区の研究会の皆さんに、世話人校長として「こういう状況をプラスにとらえ、みんなで社会科の面白さや奥深さを学んでいきましょう」と話をしました。さらに、全小社神奈川大会があと4年後、令和10年度に再びやってくるという意味からも、今年度の市社研の役割は大きいと思います。

また、昨年度会長の加藤和之校長先生も昨年度の研究計画の巻頭言に書いておられましたが、今年度も5月の最初の研修会で授業者・提案者を決定する場面において、各学年2人、計8人の市一斉授業研の授業者、研修会や8月の夏季特別研修会での提案者をすべてスムーズに決めることができました。わたしが研修会で現役のころには、明らかに今よりも多くの会員がいたにもかかわらず、提案者を決める時間は沈黙が伴うものでした。しかし、それから30年が経過する今、前述のように「社会科指導がよくわからない」という先生方が増えたにもかかわらず、「自ら実践することで学ぶ」という、まさに参加者の「主体的」な姿勢が根付いてきていることに、市社研の、もっと言えば横浜の教育の未来に光をみるような気がしています。わたしは、学校のもつ機能の中で最も大事なことの一つは「人材育成」だと思っています。そういう意味からも、加藤前会長のおっしゃるように今年度の研究が、こうした「良い流れ」のまま、「会員一人ひとりの手」で、着実に進められることを願い、自分ができることを進めていきたいと思っています。「温故知新」の言葉を胸に、市社研の伝統、先輩方から教えていただいた、「社会科の心」を子どもたちに伝えていきたいと思っています。

今年度第一回目の役員会で、自分はこうするということで「4つのする」というお話をしました。「問題解決的な学びをする」「ICTを活用する」「やさしい言葉で語れるようにする」「本質を見抜けるようにする」という4つのする、です。そして、研究会の更なる発展に一番必要なのは、なんととっても、皆さんの力です。この、伝統ある横浜市小学校社会科研究会で、気負わず、臆せず、志を高く掲げ、笑顔をもって、ともに学んでいきましょう。

市社研の主役は「あなた」と「あなたと日々過ごす子ども」なのですから。